都会の空き地で出会い違う
人の意識をリセットする装置としての空間や建築物への提案

上野華子

1. はじめに

『ディストピアの出口』は現代に生きる私たちの誰しもにとって関係のない話ではない。けれども実際には、都市の問題は都市に住む人が考えるべき事柄であり、地方の問題は地方に住む人が考えて解決するべき問題であると切り分けて論じられることが多い。当論文では、都心六区に焦点を当てたこのお題は、そこに住まう人、あるいはそのエリアに何らかの関わりがある人だけが取り組めばいい話ではなく、今という同じ時代を生きているすべての人にとって何らかの契機や糸口となりうるのではないかという考えをもとに、千葉で生まれ育ち、東京で十年暮らし、瀬戸内海の離島へ移住した私自身の体験を踏まえて、「物事を切り分けて考える」在り方そのものがディストピアを生み出すベースとなっているのではないかという視点に立って出口への提案を行っていく。

2. 提案の背景

2.1 「影」とは何か？

まずは、ディストピアを生み出す要因となっている「都市の影」とはどんなものなのか、その「影」ついて定義してみたい。当然のことながら、「影」は一つの事象を指すのでもなく、また一つの切り口から語ることができるものではない。物理的な影、経済的、法律的、倫理的な意味合いにおける影など様々な要素のものが存在する中で、私の捉える影とは次のようなものである。つまり、「影とは、切り捨てられたもの、見ないようにしているもの、気づかないようにしているものの中に存在している何か」と定義付ける。これは、意識的になされていること、無意識的になされていることのすべてを含む。

そこからさらに進んで、「影＝無関係とされていること」としたい。無関係とは、自分とは関係がないとされていることである。そして影とは、そのようなもの、あるいはそのように見なされた結果生まれたものであると考える。そして、この在り方（態度）は都市生活の基本となっていると考える。実際には都市に限らず地方でも同じような現象が生じているが、関わる人間の絶対数の多さと少なさによってその強度は変わってくる。例えば過疎地のように関わる人間の絶対数が極端に少ない環境では、そこにいる人間すべてが何らかの形で自分と関わりを持っている可能性が高く、現実的にも心理的にも「無関係である」とすることはできない。対照的に、都市では関わる人間の絶対数が極端に多いため、その環境で生活する上では、「自分とは関係がない＝無関係である」という在り方（態度）を取らないと支障をきたす場面が無数に出てくる。そのため、この在り方の強度が強く、これが都市生活でのベースとなっている。

また、「都市の影」とは一つの大きな社会形態としての表れを指すが、これを紐解いていくと、実際には、「個人の中で生じたもの（影）」→「家庭やグループの中で生じたもの（影）」→「会社や学校の中で生じたもの（影）」→「社会や都市の中で生じたもの（影）」という順序で拡大的に反映されており、個の要因が集まった総和として出来上がっているものであるという点も指摘しておきたい。これは逆を返せば、「都市の影」への解を見出そうとするならば、「個の影」にまで遡ることなくして根本的な解決は得られないということも意味している。

2.2 問題意識

2.2.1 場面その①

ここで、私自身がこの問題意識を持つに至るきっかけとなった場面を２つ紹介したい。一つ目は、「東京の電車の中」という場面である。具体的には、電車に乗り合わせた人すべてに対して、（同じ車両の人も、半径数メートルにいる人も、すぐ隣に立っている人も等しくすべてに対して）「知らない人」「他人」「無関係の人」という前提が成り立っていることである。ここでは、「今、目の前にいる人たちはすべて自分とは無関係である」という方程式が成り立っている。この状況に対し、「これは見方によってはものすごく異様なことではないか？」という疑問が沸いたことがあった。私自身、大学時代から電車で都心へ通い、その後東京で 10 年暮らしていた時には気づかなかった「当たり前のこと」が、都市を離れ、関わる人間の絶対数の少ない環境に身を置いたことによって違和感として感じらるようになったのである。

この場面では、「本当はそこにいる誰とでも笑い合える可能性を持つ」という事実は蓋をされている。例えば、「自分が何かを落として、たまたまそれを拾ってくれた人にありがとうございますとお礼を言ったら、その人が笑顔を返してくれてお互いに笑顔になる」という現象はいつでも起こりうる可能性として存在している訳だが、実際にはないものとして閉ざされている。電車に乗り合わせた全員と逐一笑顔や挨拶を交わしていたら大変だが、山登りの時にすれ違う知らない人と自然に挨拶を交わし合うようなことは決して電車の中では起こらない。それは、「（目の前にいる人は）自分とは無関係である」という暗黙の了解（縛り）が作用しているからであり、都市になければなるほどこの縛りは強くなる。その意味で、東京の電車の中においては、自分の目の前にいる人はすべて影である。そこに存在しながら存在していない、影として存在していると言える。

さらにここでの違和感を際立たせているのが、電車に乗っている人のほとんどが自分のスマホを手にしてその中を覗き込んでいるという光景である。それはあたかも、それぞれの人の頭から風船ガムが飛び出してその中へと入り込み、それぞれがどこか別の世界へトリップしているようである。「ここにいるのに、ここにいない。」というその現象からは、「皆一様に目の前にいる人をいないもの（影）として、その人自身はここにいない。」という言葉が浮かんでくる。

2.2.2 場面その②

二つ目は、「友だちと一緒にいるとき」という場面である。（ただしこれは、友だちに限らず、家族、パートナー、知人、同僚や上司などある程度の関係性のある人との間にも適用できる。が、ここでは分かりやすい例として友だちという間柄を取り上げている）具体的には、「ふたりでおしゃべりをしている時に、目の前の友だちがスマホで何か返事をしている」という場面である。これはとてもよくあるシーンであり、また、相手方だけでなく自分自身もまた同じようにやっていることでもある。

けれども、日常当たり前に起こっているこの現象をあらためて眺めてみた時、そこで何が起こっているのかと言えば、その瞬間、その人は別の世界へ行っているということである。ここでもまた、「ここにいるのに、ここにいない。」という現象が起こっている。それがどんなに短い時間だったとしても、その時、その人（の意識）はここにはない。おしゃべりの途中で何かに返事を返している人（A）はここにはおらず、また、その人の目の前にいる人（B）は存在しないものとなっている。

2.3 問題提起

上記の問題意識を捉えたところで、『ディストピアの出口』への具体的な提案につながる土台として、「目の前に現れた人に対して、自分と関係があると思えるかどうか？（＝無関係ではないと思えるかどうか？）」という問いを立ててみたい。なぜなら、自分とは無関係であると切り捨てたものの結果が影という事象となって表れていると考えるからである。無論、現実的に都市にいるすべての人と関わりを持つことはできない。一個人が一日活動をする中で目の前に現れる人間のすべてと何らかの関係を結ぶことは不可能である。ここで問いたいのは、「関係を持てるかどうか」という実現可能性ではなく、実際的に目の前に現れた人間に対して、「何らか自分と関係があると思えるかどうか」という、ものの見方、人間の見方、世界の捉え方に関わる、人間の在り方そのものへの問いかけである。

且つ、この問いは各個人が持つ観念に対して向けられたものではない。例えば、キリスト教でいう「汝、隣人を愛せよ」という教えを信仰して実践するというような、信念や主義としての話ではなく、体感覚（たいかんかく）としての話である。からだの感覚として、実感として、そう思えるかどうか。自分の目の前にいる人に対して、（自分と）無関係ではない、と体感覚として感じられているかどうか？という意味での問いである。

ここで、右脳の機能にも少し触れておきたい。脳の中でも右脳の領域はイメージや空間認識、感情や感覚を司ると言われている。右脳には、「物事を切り分けない」「一体感を感じ取る」などの特徴があるとされ、これは身体や五感などの感覚を通して活性化される。物事を切り分ける思考や言語から距離を取り、からだや感覚の方へフォーカスを戻していくことで、人との間につながり感（自分と相手は無関係ではないという感覚）を実感として感じやすくなるのではないだろうか。過剰に切り分けられた世界に住む私たち現代人が、こういった仕掛けを通じて人とのつながりを実感として感じられる体験を得ることは、目の前にいる人をいないもの（影）としてバーチャルな世界へ入り込み、目の前にいる人との間に感じられないつながりをオンライン上で求めるような在り方に変化を生んでいくかもしれない。

③時間を外す

三つ目の仕掛けは、時間を外すことで「今ここ」の感覚や体験によりフォーカスしやすくするということである。例えば、時間を意識した瞬間に私たちの脳は過去や未来へ飛んでいく。「もうこんなに時間が経った」あるいは「もう何時だから次の予定のことを考えなければ」というように、時間はあっという間に私たちを「今」から引き離す。時間を意識した途端に、自分がたった今感じている感覚や体験そのものに没入することは難しくなり、そこから離れていってしまうのである。そのため、時計を持ち込まない、コンテンツを体験している間は目につく位置に時計を設置しないようにする、などの仕掛けが効果的になってくるだろう。

また、前項の問題意識のところでも述べたが、スマホで何かを見ている時やネットで何かを見たり調べたりしている時には、ここにはいない状態になっている。からだはここにあっても、意識はどこか別の世界、ここではないどこかや何かの中に入り込んでいる。意識がここにいないことで、いま目の前にあるもの、いま目の前で起こっていること、いま自分がからだや五感が捉えていることを十分に感じられなくなってしまう。それはつまり、自分自身のからだや感覚との回路が細くなっていくということであり、必然、目の前にいる人とのつながりを感じ取る回路も細くなっていく。時間を外すという仕掛けは、今ここに焦点を当て、今ここを十分に感じられるようにするために効果的な役割を果たす。

3.2 提案のたね〜私自身の体験〜

3.2.1 エピソード①ビッグイシュー基金での体験

ここで、上記提案のアイディアの元となった私自身の体験を二つ紹介したい。東京に住んでいた頃、ビッグイシュー基金という NPO で働いていたことがあった。ビッグイシューは 1991 年にイギリスで創刊されたストリート新聞で、ホームレスや生活困窮者に雑誌を売る仕事を提供することで正当な報酬を与え、それにより社会復帰の支援を目的としている。日本では 2003 年に創刊し、有限会社ビッグイシューに併設される形で 2007 年にビッグイシュー基金が設立されている。ビッグイシュー基金では生活全般のサポートを行っているが、ビッグイシューの理念に則り、困窮者に「施し」を与えるのではなく、人間としての尊厳を取り戻すための活動に力を入れているところが特徴である。その中で、ホームレス状態の方たちと一緒にサッカーやキャッチボールをしたり、月に一回開かれるオープンなサロンで一緒に料理を作って食べる、ということをしていたのだが、それらの体験がとても鮮烈なものとして記憶に残っている。

ビッグイシュー基金のコミュニティーは、利用者さん（雑誌を販売する販売者や相談にきてつながっている方）、スタッフ、ボランティアで主に構成されている。ここに集う支援者（スタッフとボランティア）は、ラベルによる偏見や先入観が元から少ない者、もしくはラベルに対する疑問や問題意識を持っている者が基本となっており、かつ組織の理念や気風や活動のあり方から、通常の社会で起こるような差別や分断が生まれにくい。「ホームレス（状態にある人）」と「支援する人」という分類で立場を切り分けてお互いを隔ててしまうのではなく、利用者と支援者がよりフラットな関係性を結びやすい土壌があるのだが、その中でも上記のような「からだ」を使って同じ目的を実践する体験には特筆すべきものがあった。

その体験においては、みないっしょくたにに混ざり、からだを使って、一緒に同じことをする。上手い下手、早い遅いということは重要視されていず、普段以上にお互いのラベルへの意識がより希薄なものとなる。同じ一つの目的に向かってただその場を共有しているという、その時間の中にある体験そのものへの意識が開いているような状態である。そこには、フラットになれる感覚、純粋な子供のような感覚、自由さ、広がり、喜び、温かさのようなものが生まれる。お互いの境界線が溶けて、存在の中心と中心でシンプルに響き合う体験として記憶されている。

3.2.2 エピソード②唐橋浜の盆踊り

私の移住した瀬戸内海の豊島は人口 800 人弱の島である。この豊島の唐橋浜という地区では毎年 8 月 14 日に盆踊りが開かれる。前日の 13 日には島で最も大きい集落の港で島全体の夏祭りも行われるが、こちらが公共的、大衆的な祭りであるのに対して、唐橋浜の盆踊りはあくまでも盆踊りがメインのニッチでディープなお祭りである。豊島に移住してきて七年、唐橋浜の盆踊りに出かけたことはあっても、輪の中に入ってしっかり踊ったことはなかった。それが去年、初めて盆踊りの輪の中に入って踊ってみたことで、とても衝撃的で感動的な体験をしたのである。

振り付けがわからないながらも輪に入り、前や後ろの人の振り付けを見よう見まねで真似しながら踊り続けていたらだんだんと踊れるようになった。ぶっ通しで踊ること２時間あまり。この場では踊っている者に随時お酒が振る舞われ、それを飲みながら踊る者が多いが、お酒を飲まない者であってもその場に没入することができる。

ここで得た衝撃（感動）はなかなか言葉では表現しきれないものだが、あえて言葉にするとしたら、「そこにいる人と瞬時につながれる」感覚である。しかもそこに区別はない。そこにいる誰とでも、というところがミソだ。よく知っているあの人はもちろん、どこの誰だかわからないおじいさんも、普段は接点がなくて話したことがないあの人も、なんとなく怖そうであえて関わりたくないと思ってるあの人も、どこかの国からやってきている知らない外人さんも、すべての人とである。自分の目の前にいる誰とでも瞬時につながれる、という仕掛けが盆踊りの中にはあった。

盆踊りの輪は２重の円になっていて、それぞれが逆の方向に向かって進んでいく。（内側と外側が逆周り）一連の振り付けは基本的に進行方向に向かって前を向いた状態で踊るが、その中で一場面だけ、円に対して垂直の方向を向いて交差するような振り付けがあり、それによって円の内側と外側の人が顔を見合わせる仕掛けになっている。その時に、なんとも言えない交流が生まれるのである。それは、笑顔と笑顔、ハイタッチ、乾杯、かけ声など様々である。あるいはそこまでの表現はなくとも目で挨拶をしたり、ただお互いの気配をなんとなく感じ合うということだったりするかもしれない。踊っている人によright、またその組み合わせによって起こる反応は変わりうるが、そこにはなんの評価もなく、ジャッジもなく、優劣もない。ただその場で、その踊り、音、光、空間を共有してともに楽しみ、味わっているということだけが唯一共通していることである。

円は周り続けているので、その振り付けのたびに顔を合わせる人が変わっていくのもおもしろい。盆踊りはノンバーバルコミュニケーションなのだと実感した。その体験は言葉での理解をはるかに超えていて、ほんとうにすごいという凡庸な表現しか出てこないのが正直なところだった。盆踊りを通して至れるのはすごい領域なのではないか。そしてこの仕掛けを生み出した日本文化や日本人の意識の深さにも感銘を受ける思いだった。

豊島に移住してきた自分は、どこか宙ぶらりんな存在である。土地の者でもなく、その土地に嫁いだわけでもなく、地縁もない。知り合いはいるが、どこかでよそ者感は拭い切れない。それは、しがらみがないという気楽さである一方で、自分はこの場所に入り切っているわけでもないという所属感の薄さにもつながっている。けれど、盆踊りの中に入ったら日常のその感覚はどこかへ吹き飛ぶ。そこにいる人、いま自分の目の前にいる人と無条件でつながれる瞬間と感覚があるからだ。それは、すでにそこにある既存のコミュニティに受け入れてもらったというのともちょっと違う。盆踊りが地域の一体感や連帯感を強める働きを持ってきたことは確かだが、私が感じたのは、もっとフラットで、自分と相手の間にはなんの段差もないという感覚である。私とあなたがまったく等しく同じ地平に立っている、その立ち位置で、相互に出会い合う体験なのである。それは、生命（いのち）と生命（いのち）が出会う体験と言ってもいい。

ノンラベル、ノンバーバルな手段によって、誰とでも瞬時につながれる（つながりを感じることができる）体験は簡単に起こりうる。そこでは立場が問われることもなく、高度な技術も資格も経験も必要ない。これは神がかった領域でもなければ、難解で困難な修行の末に一部の人だけが辿り着ける境地でもない。すぐそこに転がる石のように存在するシンプルでありながら奥深い仕掛けである。今年もまた盆踊りの輪の中に入って実際に踊り、その感覚を体験し、このことへのさらなる確信を深めた。

盆踊りには、装置における三つの仕掛けがすべて含まれている。ノンラベル、ノンバーバル、今ここという要素である。都会の空き地で、日本で古来より続いてきた盆踊りを、復古としてではなく、新たな感覚や意識を呼び起こすものとして体験できたら面白いのではないだろうか。

3. 提案及び具体的な計画

3.1 都会の空き地〜人の意識をリセットする装置としての空間や建築物への提案〜

3.1.1 概要

都心六区の中に、人の意識をリセットする装置としての空間や建築物を設置することを提案する。この装置は、人の意識をリセットし、「目の前にいる人は自分とは無関係である」と感じている状態から、「あらゆるものは生命（いのち）のレベルでつながっていて、自分とは無関係ではい」と感じられる状態へ切り替えていくきっかけを提供するものである。

具体的には、空き地のような空間、空き家や遊休不動産などの使われないまま残されている建築物、建て替えや新築で新たに作られる建築物など、どのような形態でも構わない。ただし、この空間や建築物を利用する上では下記のような前提と仕掛けが必要とされる。

3.1.2 前提（利用規約）

この装置自体の形状形態は問わないが、前提として必要なことがある。それは「電波を使わない」ことである。この点において最も理想的なのは、「電波の届かない空間もしくは建築物」を作り上げることである。電波の届かない建築物については、『圏外建築』のような建築物が実際に建造されれば画期的であると考えるが、そういった環境が準備できていなくても、装置を利用する前提として「電波を使わない」選択を取ることでこれは実現される。

具体的には、この装置を利用する前に、利用者は「電波の発信する電子機器を置く」ということが必要となる。空間や建物の内部へと入っていく前に、入口のところでこれらを置いておくというアクションが利用上のルールとして設定されている。これは、飛行機に乗る際にスマートフォンを機内モードあるいは電源をオフにして電波を発信しない状態にしておくという利用規約のようなものである。この意味合いにおいて、人の意識をリセットする装置としての空間や建築物を総称して「都会の空き地」と呼ぶことをとする。

3.1.2 三つの仕掛け

「入口でスマホを置く」というアクションを取った上で、装置としての機能を効果的に働かせるためのポイントとなる仕掛けが三つある。

① ラベルを外す（つけない） ― 分類や属性など（への認識）のない状態で出会う。

② 思考（言語）を外す ― からだ、手、感覚を通して出会う。ex: スポーツ、料理、音楽、陶芸、アート、盆踊り、そのほかなんでも

③ 時間を外す ― 今ここで出会う。いつかやどこかへいってしまわない。

これら三つのポイントを押さえるための仕掛けを設定することにより、意識をリセットするための舞台が整うことになる。

3.1.3 仕掛けの説明

ではここから、三つの仕掛けについてそれぞれ詳しく説明していこう。

①ラベルを外す（つけない）

この装置の中では、いわゆる自己紹介を行わない。むしろあえて自己紹介をしないというルールを仕掛けとして設けておく。社会の中で一般的に行われている名刺交換のような行為を意識的に取らないことで、お互いにラベルを貼り合う、分類し合うという行為を外してみるというのがその狙いである。ラベルとは、肩書き、所属、立場、年齢、性別、国籍、人種、学歴、スキル、出身、生い立ちなどなど、自分もしくは相手を定義付ける何らかの要素のことである。ここでの意図は、普通は相手を認識するために必要とされるこれらの情報（ラベル）をあえて入れずにただ目の前にいる人と出会う、という体験である。

ラベルは、相手を素早く認識（把握）するのに役に立つ。「目の前にいる相手は何者か？」という問いに対して、何らかの分類を行うことで私たちは安心感を得ることができる。また、何らかの共通項を見出すことで相手とのつながりを感じたり、話題が生まれるきっかけにもなる。そのようなメリットは、私たちが社会の中で円滑にコミュニケーションを行う上で欠かせないものとなっていることは事実である。しかし、相手との共通項を見出すことは、（自分の）仲間であるという意識を生むことと同時に、その反対側（相手は仲間ではない、無関係である、敵である）の意識を生むことにもなる。あるいはその逆もあるだろう。ラベルがあることによって、自分と相手を最初から違う分類に定義づけ、本来そこにあるはずの共通項を見出せなくなってしまう可能性もある。

ラベルはとても便利なものである一方で、私たちのものの見方を狭め、制限的な在り方に留めてしまうことは免れない。目の前に立つ人物が「自分は社長である」と名乗れば相手をそのようなものとして見るだろう。「無職である」と聞けばそのような認識で相手を見ることになる。何らかのラベルが提供された時点で、そのラベルを通して相手を見ることになり、そのラベルの外側あるいは奥にある別の要素を見出しづらくなるのは容易に想像できるだろう。

そのため、ここでは通常社会の中で行われるようなラベル付けをあえてしないことで、人の意識をバイアスのかかっていない状態にリセットする仕掛けを設定する。ラベルのない相手は、ただそこにいる人として認識されることになる。自分もまた同様に、ただ今ここにいる自分として存在することになる。そして、双方ともにそのような状態にあるとき、目の前にいる人とただ出会い、関わることをしてみたらそこに何を見出すことができるのか？どんな体験・感覚・発見が生まれるのか？というのがこの仕掛けの意図するところである。

②思考（言語）を外す

二つ目の仕掛けは、思考（言語）をできるだけ外すということである。思考や言語は物事を分類する機能を持っている。これは、人であれ物であれ事象であれ、対象物となるあらゆるものを切り分ける機能である。世界をそのように切り分けることで把握するためのツールが思考や言語であり、これはこれ、それとそれ、それはあれ、というように、あらゆるものは別々の存在であるという認識（土台）が生まれていく。そして切り分けるという機能の性質上、それぞれの「違い」や「差異」がフォーカスされることとなる。いわばこれは、私たちの分離の在り方のベースとなっているところである。分離の意識は、比較、優劣、競争、対立といった現象を生み出す元となっているものであり、私は私、あなたはあなた、私とあなたは別のものという認識は、主に思考や言語によって支えられている。

思考や言語があることで世界を認識（把握）しやすくなるが、一方では、そこにある実態そのものを感じ取ることから離れてしまう。思考や言語による認識の領域に入ると、それがバイアスとなり、そのままに感じるということが困難になるのである。思考や言語は、「そのままを感じる」あるいは「感じることによる認識（把握）」の妨げになりうる。

今の社会は、言うまでもなく思考（言語）の機能が過度に促進された状態である。この機能ばかりが強調・増長され、行き過ぎた結果、みなが頭でっかちで、頭の中の仮想世界の中で生きているような状態にある。脳の機能で言えば左脳ばかりが使われている状態、ネドじゅんの言ういわゆる左脳過剰な状態にある人がほとんどである。あたまが肥大化する一方で、その自然な成り行きとしてからだは忘れられ、置き去りにされ、感じることや感覚の機能は落ちている（退化、縮小している）状態となっているのが我々現代に生きる人間の基本的な在り方である。この左脳過剰状態を促進するのに大きな役割を担っているのが、スマホやネットなどのバーチャルな領域と言えるだろう。「都会の空き地」ではその領域を刺激するものがない環境なので、からだ、感覚にフォーカスするのに最適な装置となる。

この装置の中で行われるコンテンツは、「からだ」や「手」や「感覚」にフォーカスしたものであれば何でもよい。スポーツ、料理、音楽、陶芸、アート、盆踊りというのは私の思いつくほんの一例である。この中でも盆踊りはとりわけその効果が高いと見込まれるが、その理由については自身の体験から後ほど詳述する。また、これらのコンテンツは、ひとりで成されても、複数人で成されても、どちらでもよい。ひとりでやれば、自分自身が忘れていたからだや感覚に出会い直す機会となるだろうし、人と共に何かをやれば、体感覚（たいかんかく）を通じて相手と出会ったり、感じたり、つながるための機会となるだろう。

1 「圏外建築 –超監視社会からの解放–」梅澤 秀太（日本大学海洋建築学科 2022 年卒業制作作品）

2 ネドじゅん公式ホームページ（https://nedojun.hp.peraichi.com/）

3.1.4 期待される効果

それではここで、都会の空き地たるこの装置を利用した場合、そこへ入る前と出た後でどのような変化や効果が期待されるのかを考えてみたい。まず、入る前の状態として、「私たちは切り離されている」「誰ともつながっていない」「どこにも所属していない」などの状態が想定される。世界は個別バラバラに存在しており、色々なものが分かたれているという感覚である。これは特に珍しいことではなく、むしろ私たちの通常の感覚やあり方に近いと言えるだろう。さらに、「今ここにいない」「目の前のことに意識が向かず、いつかどこかへ抜けている」というような状態も見受けられるだろう。これもまた私たちの通常の状態である。

この状態から、装置の前提と三つの仕掛けを元にした体験を通じてもたらされる効果とはどのようなものだろうか。まず挙げられるのは、「つながり感」である。自分自身とのつながり、目の前にいる人とのつながりを、頭ではなく体感覚で捉えることで生じる感覚である。私とあなたは無関係ではなく、生命と生命という点において共通性を持った存在であるという感覚を得られるだろう。これらの感覚や実感からは、「色々なものはつながり合っている」「世界は関係し合っている」という認識が生まれる可能性もある。また、「今ここにいる」「自分のからだや感覚の中にしっかりとおさまっている」「地に足がついている」という感覚の強化も起こりうるだろう。これらの感覚によって、理由のない安心感や大丈夫という感覚が生まれることも想像できる。

それとは対照的に、入る前の状態として、「自分は特定の分類に所属している」という意識や感覚が強くあった場合、出た後には、自分をある分類の中に押し込めていた意識や感覚がゆるみ、解け、「制限的な意識がちょっと広がる」ということも起こるかもしれない。

3.2 計画地

都会の空き地というこの装置は、都心六区のどこに設けられても問題はない。むしろ都心六区を行き交う人々にとってのスイッチポイント（中継拠点）となるように、各所に散りばめられた装置として活用されることが望ましい。人々は都心で働き、交友し、社会活動を行う中で自身の意識をリセットするためにこの装置を利用する。それは、都会のオアシスとなっている公園やカフェに新しい機能が加わったものとして位置付けられる。

しかし、六区の中から最初の計画地を選ぶとすれば新宿区にしたい。それは、私にとってもっとも縁ある区だからである。大学時代から新宿区に通い、その後の二つの就職先も新宿区であった。幼い頃に大久保通りにあった官庁宿舎に住んでいて、そこで初めて「乞食」という言葉を覚えたのもここだった。新宿区は、私自身が東京の中で最も足を運び、歩き、長時間その身を置いてきた区であるので、この地に最初の装置の実現を見てみたいというのがその理由である。中でも、新宿中央公園や若松住宅などをその候補地として挙げてみたい。

4. まとめ

4.1 都市の良さ

本コンペのテーマ『ディストピアの出口』は、都市の影に目を向けるところから始まった。しかし、影が生まれるのは光があるからである。都市の光とは何か。これもまた様々に言い表し定義することができると思うが、私がここで着目したいのは、「都市にはあらゆる人が集まっている」という事実である。都市に集まる人は似た属性だけではない。あらゆる属性や分類の人が集まり、種々雑多に混ざり合っているのが都市である。

ここには、一見自分とは何も重ならないように思える分類・属性の人たちが存在している。地方の自分の村に住んで一生をそこで過ごすだけでは絶対に知り合わない人、知り得ない価値観にも出会えるのが都市なのである。ここで目の前にいる人を自分とは重ならない人として切り分けて影にしてしまうのではなく、何らかの形で混ざり合うことができれば、人が誰しも持っている枠や制限を大きく外すこともできるのではないか。都市での在り方、都市の活用の仕方によって、人の意識が開かれていくための潜在的な可能性を大きく秘めているのが都市と言えるのかもしれない。

4.2 都会の空き地とは

最後に、あらためて都会の空き地について述べてみたい。ここは、そこにあるのが空間であれ建築物であれ、都市の中の穴のようなものである。この穴は人をリセットする機能を持つ。都市にありながら電波を使わないそのスペースは、そこだけが山奥のような場所である。あるいは、秘境、パワースポット、聖域にさえなりうるかもしれない特異な空間である。H.D. ソローが暮らしたウォールデンの森のようでもあるかもしれないし、文字通りドラえもんやのび太君たちが遊んだ昭和の時代の空き地でもあるかもしれない。私たち現代に生きる人々は癒しを求めて旅に出る。都市生活に疲れ、何かが枯渇し、自分に行き詰まり、リフレッシュのために、新たな刺激を求めて、あるいは自分でもよくわからない何かを探してはるかな地へと出かけていく。

私自身、都市周辺に数十年間暮らした後に移り住んだ地で作りたいと考えたのは、日常から離れて自分に還るためのリトリートプログラムだった。それは、都会のように建造物が密集しない広がりのある空間と、地方の自然豊かな環境だからこそ実現できるものと考えていた。たしかにそれはそうであると思う。環境の力は大きい。その考えは今でも変わっていないが、本コンペのテーマを友人に共有した際、「都会の真ん中に（私が）豊島でやろうとしていることを持ってきたら面白いのでは？都会にこそ必要なのでは？」という問いかけをもらったことがこのお題に取り組むきっかけとなった。私が都市生活から離れ、そことは違う環境でやれることを、とどこかで「切り分けるように」考えていた在り方に一石が投じられたように思ったのだ。

リトリートとは、「忙しく過ごす日常生活から一時的に離れ、心身をリフレッシュして自分と向き合う時間を過ごす旅」という意味である。私が豊島で生み出したいのは、人間をいちどリセットする契機となるプログラムや場である。できるだけ思考を挟まず、普段は使わないからだと感覚を使い、そちらを開いていく。人間としての全体性を取り戻し、生命（いのち）である自分に還るための場所である。それを都会の中に作ってしまうというアイディアが都会の空き地である。

しかしながらこれは、強制施設や矯正施設のようなものではない。人はそこへ自らの意思で入って行く。探究心から、あるいは遊園地や映画館へ出かけるようにエンターテイメントや遊びを目的として、あるいはまた、癒しや自己刷新を求めて。そうでありながらも、同時に、放り込まれるものでもある。自らの選択でそこへ入り、そのことで自動的にある状態に入ってしまう。そこに面白さがあるのではないかと思っている。

4.3 新たに生まれる世界線

「都会の中の空き地で出会い違う」とは、自分自身や人に対する意識（感覚、体感）が変わることで、目の前にありながらそこにはない「影」としていた誰かと出会い直したり、新たに出会える可能性を表している。そこから描かれるのは、人と人が相互に出会い合うシーンである。

空き地に一歩足を踏み入れれば、目の前にいる人、今ここにあることに向き合わざるを得ない。そうしてみたとき、そこには何があるのだろうか？どんな世界、境地、体感、発見や気づきがあるのだろうか？そしてどんな自分に、どんなあなたに出会えるのだろうか？

都会の空き地でリセットされた自分の状態を持って、私たちはまたあらたに人間活動、社会活動を行う。生命（いのち）と生命（いのち）としてのつながり感を得た状態、もしくは、わずかながらでもその確かさが増した状態で、仕事、学業、経済活動、創作活動、人との関わり、遊び、すべてが行われる。そこからは、どんなアイディアが生まれるだろうか？どんな言葉が、どんなアクションが、どんなふるまいや選択が生まれるだろうか？そして、どんな社会や未来が生まれていくだろうか？私はそこから生まれる新たな世界線を見てみたいと思うのである。

4.4 想像力からの創造力へ

想像力を使いなさい、鍛えなさいというメッセージは、始終四方八方から降り注いでいる。社会の中のあらゆるシーンでそれは求められている。けれども、想像力とは務めて絞り出すものではない。なんとか頑張って膨らませるものでもない。意図や努力、思考の力だけで作り出すものでは本質的にないからだ。

想像力とは生まれるものである。それは頭から生まれるようでいて、実はそうではない。実際には、その人がからだや感覚を使って体験したことがからだの中に堆積して目には見えない土壌となり、この土壌から種が芽吹くようにして頭を通して現れ出るのが想像力なのである。

想像なくして創造は生まれない。体験なくして想像は生まれない。これが私の考えるディストピアの出口である。

4 いい風が吹く。（https://www.iikazegafuku.com/）